

(城西人文研究第17卷第2号)

一人称のバシュラール

——『バシュラールと過ごしたひと夏』とその研究Ⅲ——

越坂部 則 道

日本では『水と夢』や『空間の詩学』等、イメージ論の作家として有名なバシュラールは、本来、科学認識論を専門とする哲学者であり、ソルボンヌの科学史・科学哲学の教授であったことは、よく知られている。ソルボンヌの前は、デジョン大学の哲学科教授であり、その前は郷里のコレージュ（高等中学校）の物理と化学の先生であった。要するに彼は一貫して科学畑の哲学者であり、詩の評論を書くようになったのは、むしろ晩年からと言ってもよい。

イメージ論を書く以前の科学認識論の著作のなかに、イメージ論の萌芽を見つけるとするならば、それは『科学的精神の形成』の冒頭の文章になるだろう。

「科学の進歩の心理的条件を探るとき、科学認識の問題は障害ということばで提起しなければならぬ、という確信にほどなく到達するだろう。⁽¹⁾」

バシュラールの華麗なイメージ論も、その出発点においては、「障害」という形で提起されたのである。客観的認識を阻害するもの、科学的思考を歪めるもの、これを「障害」と呼んだのであるが、この「障害」から、いかにして精神を解放し、真の科学を形成するのか。これがバシュラールの最初のテーマであった。

ところが、この「障害」は、解放などという次元をはるかに越えて、人間の精神の深奥に根をはり、精神の行為に強く作用するものだった。科学認識論の眼から見れば「障害」になるこのイメージ群も、逆に、詩的精神という観点から見れば人間的な豊かさ、想像力の豊かさの原点になるのだ。こうしてバシュラールはこの「障害」を別の角度から、前向きに、積極的に、評価しはじめる。

具体的にこの「障害」は「最初の経験」という形をとってあらわれる⁽²⁾。いうなれば第一印象であり、素朴な体験、社会の俗説、言い伝え、先入感などがそれに当たる。このような第一印象が心理的に強い影響を与えて、科学精神を歪める一方で、人間の心を動かし、たましいの上昇を生み、生そのものの力になる。

はっきりと明言したわけではないが、レスキュールはこの「最初の経験」として、個人的な、幼年時代の体験を考えているようだ。つまり一人称のバシュラールである。彼のイメージ群の核の一つに、一人称の体験を置いて考えるという方法は、バシュラールの私生活を知る友人の立場から見れば、有効なのかもしれない。

しかしながら大部分の日本の研究者が「私的な経験」から彼のイメージ論を語ることに對し、強い抵抗感を示すのは、ある意味で、当然のことといえよう。イメージの源泉に「私」を認めると、そこから広がるイメージ論そのものに客観性がなくなり、説得力に欠けるようになる。それにもまして重要な点は、バシュラールの私生活を全く知らない人間が彼のイメージ論を語れなくなることであり、それを知っている度合いに応じて、イメージ論に重みが増すという、いわば階級制度ができあがってくる。確かにレスキュールの「一人称のバシュラール」を読むと、なぜこれが一人称なのか、という表現が多数出てくる。バシュラールの私生活を知らなければ、それが一人称なのか、三人称なのか判断できないのである。

バシュラールの立場から見れば、彼がイメージの研究対象に客観性を求めたのは事実であろうと思われる。それが四元素という形になって表れたともいえる。研究素材を四つの物質に限定することによって、とらえどころのない想

像力、定まった形態をもたない想像力、その想像力の力動性を客観的に分析しようとしたのである。この四元素の法則を導入した結果、彼はイメージを研究対象として扱うことになり、イメージの主体とイメージそのものが分けられて、いわゆるイメージ分析が可能になったのである。

しかし後になって、彼はこの客観性の重視がイメージそのものを歪曲させることに気がついた。イメージは、本来動的なものであり、この動きを止め、静止した状態になつてはじめてイメージの研究分析が可能になるのだ。つまり死んだイメージを対象にしなから客観性を求めたのである。

『空間の詩学』以降、四元素の法則を離れたバシュラールは、イメージを客観的に分析するのではなく、イメージを生まれた状態で把握するようになる。主体とイメージとが分離する前の、混沌とした状態でイメージが捉えられ、もはや主体とイメージの区別がつかない。イメージをことさら客観視する必要がないので、また動の状態で見るのでそれが他者のイメージなのか、自分のイメージなのか、それとも文学上のイメージなのか、社会通念のイメージなのか、よく分からないのである。以前ならば明確に区別し、慎重に抑えていたと思われる「私」のイメージが、彼の著作のなかに、生き生きとした形で表れてくるようになる。

「私達は本を読みながらあまりにも夢を見すぎる。あまりにも思い出しすぎる。読書することに、私達は個人的な夢想の出来事、思い出の出来事に遭遇する。一つの単語、一つの仕種で、私は読書をやめる。ボスコの話者が光を隠すために雨戸を閉めると、私は昔の家で同じ仕種をした晩のことを思い出すのである。」⁽³⁾

当然のことながら、「一人称のバシュラール」だけがイメージの源泉になるわけではないが、晩年になればなるほど、その比重が増してくるようである。ただ、レスキュールが考えていたほどではないにしても、四元素の法則に従うことで、当時のバシュラールが全く「私」のイメージを消去していたのではない。「一人称のバシュラール」が、彼の文学活動の当初から何らかの役割を果たしていたのである。

「私が初めて大西洋を見たのは三十歳ぐらいのときである。だから、この本では、海について上手に語れないだろうし、詩人達の本が言っていることを聞きながら、間接的に語ることになるだろう。」⁽⁴⁾

すなわち水という物質でイメージを冷静に分析する際にもその底に「私」の経験的なイメージがなければ上手に、そして客観的にイメージの喚起が出来ないのである。この意味で、「最初の経験」とは「一人称の経験」である、と言えなくもない。しかしそれが一人称なのか、三人称なのか、という区別は、イメージ論を展開する上で、さほど重要な意味を持たないだろう。

問題になるのは、そのイメージが物質の質料に起因して、どちらかといえど対象の映像表現に力点が置かれているのか、それとも質料から解放されて、イメージを生きたまま捉えているのか、こういったことがイメージ論の展開に影響を与えている。換言すれば、文学的な、詩的なもののイメージ表現から人間のたましいのイメージ表現への移行という形で、バシュラルの諸作品を考えるべきだろうと思われる。

レスキュールの『バシュラルと過ごしたひと夏』の第六章は「一人称のバシュラル」のアンソロジーであったが、初版ではこの部分が訴えられ、削除の対象になった。もちろん、レスキュールの考え方や解釈がシュザンヌ・バシュラルによって非難されたわけではなく、あくまでもアンソロジーが問題になったのである。レスキュールはそれが著作権の問題だと知りつつも、いまひとつ釈然としない様子でシュザンヌ・バシュラルを暗に批判している。

バシュユラールと過ごしたひと夏

ジャン・レスキューール

VI 一人称のバシュユラール

美、美の意志は発見の大いなる供給者である。発見、発明は欲求の行為である。欲求と親戚関係にある。過去が悦に入りながら発明されることはない。「過去を発明する」ということは、書く行為の審美機能の基本的な直観なのである。今日、私はそのことを思い出す。そして、過去が生きられなかったこと、過去を生きなければ、過ぎ去るものを未来に持つてゆくことができないことが私には分かる。結局、生全体が虚無のなかに崩れ落ちる。生の現実が見つからなかったということである。過去を発明することは、単純に過去を見つけることであり、まず初めに、過去の感覚を見つけることである。失われた道が発見することである。それは過去の寓話を作るのではない。とはいえ、あらゆる寓話のなから上手に生きられなかった現実を見抜かなければならぬ。見つけ出して発明するには、驚きの感覚、意志によっていっそう明確に捉えられた感情をただ単に付け足せばよい。

結局バシュユラールは幼年時代の美しい断章を発見しながら、書くことができた。それは思い出とは違う。発明したものがありのままに述べられたことはなく、彼はそれを彫像に織り込んだのである。もちろん、偶像化のためにはない。美に織り込んだのである。世界の美しさに配置するのだが、彼はその世界へ前進することを止めなかった。

私達の会話が思い出話でいっぱいになるといふことはなかった。記憶にたよる話もなかった。愚かな老人はくどい

話の繰り返しを行う。しかし私達はそうした事を避けてきた。「私が若かった頃」の痕跡しかない。それというもの、マイクの前で私は彼に無理やり質問をしたことがあった。それは彼が死ぬ数カ月前のことである。私の質問は、現実の生活（バシュラールの場合、本質的には、都会生活）から想像的生命（自然―田舎―四元素という次元の生命）への転換にかかわるものだった。彼はこの質問があまり気に入らなかつた。しかし、フェア―な態度を取った。彼は全速力で質問を通りすぎようとした。質問への焦燥と、いらだちと、ある程度楽しんでる様子が同時に聞き取れる。

あなたは私の存在全体のパラドックスについて聞いていますね。実際、田舎のシャンパーニュ地方に住んでいたとき、私は小学生でした。そのあと、青年時代になると、女の子をパーティーに連れてゆくことしか考えませんでしたし、田舎と触れあうことなんかありませんでした。その後、私好みではない生活を送りました、軍隊へ行ったのです。当然私は田舎というものも知るようになりました。私はロレーヌ平野で軍の仕事をしたのです。あなたならばそうしたことで世界との交流をはかるのでしょうか、ただ私は自由ではありませんでした。その後生計を立てなければならなくなったとき、パリに行きました。私はパリに行つたのです、なぜかというところから科学の勉強をするためにパリへ行つたのです。難しい条件のなかで。可能なぎりぎりそうした生活を送りました。当時私は読みました。小学生の思い出話をよく読みました。でも。個性的な読み方をしたわけではありません。次に戦争がきました、その結果もう一度自然と関わりを持つようになりました。しかし真の夢想を可能にした関わりではありません。当時研究したいと思う気持が私に生まれました、そう、あのときのことを言わなければなりません、あなたと知り合いになり、私の眼をメサージュ誌にむけさせ、私にも文学の論文が書けるんだと思ひ込んだときのことをです、当時私はあなたの言うことをよく聞きました。そしてもし次のように呼ぶことがお望みならば、夢想の

文学と呼べる本がパラドックスを生んだのです。結局四元素について私の書いたものの全部が生んだのです。私はここに閉じ込められました、いつもあなたが来られたのでよく御存知の、この四つの壁のなかに閉じ込められました。それでも、例えば、セーヌ川の岸辺を散歩して本当の川は何なのかということをおあなたに示したわけではありません、川というものを都市のなかに閉じ込めてはいけません、だから、セーヌ川の河岸に沿って歩くと私はほんの少しだけ オーブ川を思い出します。もちろん、それは自由な川で、堰の上から飛び込める唯一の川なのです。

テープにこのような話題（そして躊躇し、沈黙していることを示すために使用した印刷上の配置）が録音されていることは確かである。過去というものの骨子はそのようなものだったのである。彼はこの過去にほとんど関心を払わない——年代順に置かれたこれらの出来事に彼はうんざりしているので、お分かりのように、全速力でそこを通りすぎるのである。彫像からは離れてしまった。バシユラルは事実の目録集から逃れることに専念する。あのひどい道を走り回った後で、自由な川にたどりつき、「堰の上から飛び込んだ」という声を最後に聞くことができ、私はとても幸せである。

「驚は未来にいる。」

ルネ・シャール

自分の過去を進んで語ろうとしなかったバシユラルがそれを書いたとき、彼は自由に、適切に、書かれたものが描く入口にいるのである。

もし彼が、現実を驚きとして、急なる出現として、発見として記述する哲学者であるならば——想像力を使って、「未来へ誘う」ことに没頭するならば、彼は言葉を過去のなかに押し入れるという方法を選んだだろう——「幸せな幼年時代への回帰という怪しい誘惑に彼は負けないだろう。「夢のなかで捉えられた幼年時代は底が知れない」(『ろうそくの炎』) ということを彼はあまりにもよく知っていたのである。

そのようなものは過去ではない。幼年時代から受け継がれてきたものは、幼年時代についてあなたが知っているものであり、それを整理したものであり、誰か他の人や一部の親類縁者があなたのために、あなたの前で整理したものである。幼年時代について知っていることは、たいてい、人が私達に語ったことである。しかし幼年時代のなかで知らないことは底知れないものを構成し、これが底知れないものとして直面するので思い出すという作用を離れ、この底知れないもののなかに果てしない未来を認めて、精神が高揚するのである。結局、現在に過去を置くことは過去の一部分を未来に置くことである。

この過去の未来は書く行為のなかに現れる。バシュラールの作品のなかには、彼の歩んできた道すがらに、人生をアンガージュマンと理解させるような瞬間、場所、対象を集めているのが見られる。

それを証明すると同時にその証拠を示してみよう。彼は自分を主語として示している。夢想を支える現実のなかにあるいは現実的なものの夢想のなかに、バシュラール自身によって書かれた彼の身の上話を読み取ることができる。その問題は簡単である。つまり、私の国であり、私の家であり、私の庭、私の物々である。しかし、家庭のアルバムのイメージについて夢想を働かせることが出来たとしても、このイメージは過去を固定するのではなく、現実の瞬間を発見するのだ、と考えながらイメージを読んでほしいと私は思う、そしてこのイメージには現実の瞬間が含まれていないのだが、その入口に立ってそれを導くことが出来るようになるのだ。私はそれを切り離して、並べたにもかかわらず、バシュラールの過去、幼年時代、あるいは慣れ親しんだ身振り以上に、彼の打ち明け話こそが発見の素晴

らしい瞬間を覚えてくれる。未来に向かって書かれたのであるから、それも読まなければならぬ。私が行ったささやかな集録は、もちろん、バシュラールが一人称で語って自分を対象とみなしている文章全部を取り出ししているわけではない。各自が彼を読みながら補うべきである。

「誰かがあなたに事物を内部から語るとき、確かにあなたはその人の私生活の打ち明け話を聞いているのである。」

バシュラール

一人称のバシュラール

この表題の下で、初版では、短い抜粋文がささやかに集録されており、そのなかでバシュラールは「私」を語っていた。言うなればアンソロジーである。

この本の核心に触れることにはならないが、少し独特な方法で、一人称単数を使用しただけである。私はそれについて自分の考え方を充分説明してきたつもりである。

バシュラールの「生涯」について私は彼自身が言ったこと以外に何も言わなかった。彼はペンを手にし、本を開き、机の前に座る「存在」に自分を導いていった。書き写しさえすればよかったので、「私はヴァラージュという谷深いシャンパーニュ地方の片隅の、河と小川の国に生まれた⁽⁵⁾」という文章を書き写して「彼はヴァラージュに生まれた」と書くべきだったのか。

結局のところバシュラールがその知識を掘り下げて「発見した」幼年時代の思い出、例えば「私が病気をしたとき

父は私の部屋に火をおこしてくれた……⁽⁶⁾とか、「冬の大雪になると……、ブリュローが作られる……⁽⁷⁾」とか、「ときどき優しい祖母は、よくできた麻がらで、黒い炉に沿ってゆっくりと立ち上る煙を、炎よりも上の方で、再び燃やしたものだ⁽⁸⁾」とかいった文章に対し、私への個人的な打ち明け話のようなつもりでその責任を取るべきだったのか。

フランソワ・ダゴニエが自分の先生をこよなく慕ったのは確かだが、次のように書いたので、私を助けることにはならなかった。「客観的で、日付けが付いていて、出来事を伴う記憶は、バシュラールにとって、自分自身に対し、そして他者に対してついた人間の嘘であり、特に大人によって作られた小さな伝説である。局所的なこれらの『事実』の向こう側では、現実的な、永遠の幼年時代が我々のなかで生きている。しかも存在の音が弱まって老年になると、遅ればせながらそれが初めて現れる。バシュラールは大胆な逆説を行う。幼年時代は永遠に繰り返す未来になり、絶え間ない創造になる……」

従ってこの創造を中断し、伝記の名のもとに小さな伝説を作る大人びた人間のなかに私自身を加えるべきだったのか。

年代記や出来事をほとんど信奉せず、反対に、思い出への質問や、善かれ悪しかれ充分には体験できなかったものの再発見や、バシュラールを文学にまで高めていった、人生の「第二の読書」に最大限の価値を与える彼の（そして私達の）方法のせいで、さらには、人生を「言葉にする」芸術のせいで、バシュラール自身によって書かれた形でしか伝記というものに賛同出来なくなったのである。

もちろん私は、使用出来るあらゆる資料（手紙や日記さえも）を使うつもりはなく、一人称の文章をすべて組織的に集めるつもりもなく、むしろ他のどのような本にも応用出来る読者自身のひとつの読書法を示したかったのであり、読者のためにその道を少し整理してあげたかったのである。

私の立場は明瞭であると思ってきた。しかし法律は法律である。作者の了解なしに、もしその人が亡くなったなら

ば、相続人の了解なしにアンソロジーを出版する権利は誰にもない。私が「引用した」ものは疑う余地もなくアンソロジー的なものである。

父親の唯一の相続人であるバッシュラール夫人はこのアンソロジーを望んでいない。彼女は、私達三人、出版者のミッシェル・リュノーとフェリックス・アスコット、そして私に急速審理の申し立てを行い、七月一日、この「集録」に有罪の判決を勝ち得るのである。そこでこの新版ではその部分が削除された。

父親が自分のことをごく普通に語っている資料の収集に娘が禁止措置をとるという行為に対し、それがどうして正当化できるのか私にはもちろん分からなかった。彼女はこの集録を不十分だと思ったのだろうか。それを完全なものにしてはどうかと私に勧め、その手伝いをしてくれたのだろうか。それとも、アンソロジーはもとの資料に取って代わるのではないか、読者が資料から離れてゆくのではないかということ（いくつかの出版社がそのように疑っているらしいので）彼女は恐れたのだろうか。私はその反対で、どのような詞華集も読者をその気にさせるものだと思ってきた。どうやら私は間違っていた。

いずれにせよバッシュラールの本を買わせたいという配慮が彼の本を読ませたいという配慮に通じて、私はこの章を削除することにする。あるいは、少なくとも章を構成してきた資料のコピーを削除することにする。その筋道をどのように構成してきたのかを示し、どの出版社の、どの本の、どのページに資料があるのかということだけを言いたいと思う。そして、この本に捧げられた記事（一九八三年六月十日付のフィガロ紙）のなかでアンドレ・ブランクールが提起した、次のような問題を私も一緒に提起する良い機会だと思う。

「なぜ、「バッシュラールの」本はいまだ散り散りに分散し、かくも手に入れ難くなければならないのか。いつに

なったら全集が出版されるのか。」

私の父

まず手始めに、スユ社の「永遠の作家」叢書にあるジャン・クロード・マルゴランの素敵な本から短い文章を借りてきた、そのなかでバンシュラールは、シモン・スガルが描いた自分の肖像画について語り、「私自身の眼のなかに：父親のまなざしを」見出して、「おお、何という驚き、おお、何という思い出」と言って驚いたのである。⁽⁹⁾

この本は、私達が持っている全肖像画、絵、デッサン、あるいは写真を載せたおかげで、彼の眼のなかに、はつらつとして、茶目っ気があり、むしろいたずらっ子のような楽しさが現れているように思えるので、それだけに一層驚くべき本である。ちょうど、画家か写真家が出てきて、彼のなかにあつというまに對話する人間を目覚めさせ、その對話の相手を目覚めさせるために使う、挑発的な小さな炎を彼のまなざしのなかにかき立てるかのようである。「完成しえない、未完のものを」考える「憂鬱な時間」と呼ばれるもののなかで彼に会うことは殆どない。

私はそれをはっきりさせたかった。この幸福の偉大な教育者が福者だったなどと思っではいけない。私の日記にはこの種の痕跡が沢山ある。

私はインタビュー記者になって彼に質問をする。『あなたは冷静な方ですか。』椅子の上をあとずさりしながら、少しづつづつ言うように、彼はテレビに答えた。『冷静だって。私には分かりません…、私は静かな人間です。』私は次のように聞いた、『それでは、冷静になれますか。』今度は、まばたきをしながら、椅子の前方に進み、微笑んだ。『それをどうやって書くんですか。』

これをきっかけにして、おそらく多少偶然的で、何も考えずに集めた「私」を続けたのである。私はまず、誕生とごく幼い頃の故郷から始めた。

生まれ故郷

『水と夢』（ジヨゼ・コルテイ社版、十一ページ）にこれがある。

私は四元素の水のことを長々と考えているところなので、「同じ思い出があらゆる泉から湧き上がる」という、とても重要なことばの引用を止めた。「私の」選択が、思った以上に、私の夢に従っていたということに気がついたのである。読者を招き、読者を呼び、読者を誘う資料の最初の語は明らかに重要である。読者をその語から引き離し、遠ざけ、読者を読者自身に委ねる語、読者の思った単語が読者自身のなかのもっとも秘密めいたものにならないのかどうか、もはや読者にも分からなくなってしまいう単語、その単語によって変えられ、その単語の入り混じった読者自身に読者を委ねる語、それはなんと深いのだろう。それは読者のうぬぼれだろうか。ああ、それ以上である。主語と目的語ばかりでなく、主語と別の主語というように、なにもかもが同時に与えられるこの奇妙な領域、これがおそらく詩情である。あるいは、おそらく愛情である。バシュラールが決して捨てなかつた純粋な愛情である。

さらに私は引用を続けた。

生まれた家

それは「家の核以上のものといえよう。それは夢の核である」『空間の詩学』（PUF版、三十五ページ）と、彼は言った。

その描写は『大地と休息の夢想』（ジョゼ・コルティ社版、九十六ページ）と『空間の詩学』（PUF版、六十ページ）にある。

部屋

同様に『空間の詩学』（PUF版、三十一ページ）にある。

屋根裏部屋

同様に（三十四ページ）退屈の価値付けを行う際の、かくも驚くべき屋根裏部屋。「私の退屈の屋根裏部屋よ、多様な人生が自由の芽を私から全部奪い取ったとき、何度私はおまえを懐かしんだことだろう。」

田舎の夜の家

私の読書を（あまりにも）勝手に自分で止め、本を放り出して、私の夢想到私を委ねる、と今しがた言ったように（あまりにも）夢を見すぎながら本を読む方法が『ろうそくの炎』（PUF版、百五ページ）にある。

庭―樹木

ジョゼ・コルティ社版の『大地と休息の夢想』(三百十三ページ)にもどる。

庭―巢

二つの件が『空間の詩学』(PUF版、九十五、九十六ページ)にある。

庭のなかの小鳥

同じ(九十六ページ)。

井戸

これについては、『夢想の詩学』(PUF版、九十二ページ)にある。

『火の精神分析』(ガリマール社版)のなかから、私は次のような一人称の四つの文章を集めた。

子供の部屋の火(二十四ページ)

子供の病氣（二十三ページ）

家族の祭り（百六十八、百六十九、百七十ページ）

暖炉（三十八―三十九ページ）

暖炉の火

子供が、超炎と呼ばれるものの見方を、お祖母さんから教わる非常に重要な件があるのは『ろうそくの炎』（PUF社版、六十七ページ）のなかである。「ほら、ごらん、これが火の鳥だよ。」多分、これがフェニックスの最初の夢想である。この超炎のおかげで、いつの日か、超言語の火がともるのだろうか。それとも、超言語のおかげで、超炎の幼年時代が聳えたつのだろうか。

家の火、暖炉、については田舎の問題に入るとき私はすでに付け加えていた。

野の火、『火の精神分析』（ガリマール社版、二十九ページ）

丘、『空間の詩学』（PUF版、二十九―三十ページ）

春、『夢想の詩学』（PUF版、百二十ページ）

蹄鉄工のハンマー、『大地と意志の夢想』（ジョゼ・コルティ社版、百三十九ページ）

次に私はワインへ移った。

バシュラールにとってワインは重要なものだったといえよう。彼はシャンパーニュ人であろうとした。ディジョンでの教育のせいで、ときどき彼はブルゴーニュ人に扱われたが、そのことに抗議したものだ。故郷への想いが深く彼の心に根を張り、大地に依存する気持ちが強いので、ワインは大きな役割を演じた。私は科学的認識の役割のことを言ったつもりである。ワインは記憶を持ち、記憶を構成した。私はほとんど飲まないで、ドイツ軍占領時代、ときどきバシュラールにワインの購入券をあげたものだ。ある朝、彼は私をひどくびっくりさせたことがあった。彼が昼食に来たので、アペリティブの代わりに、何だか分からないが私の家に来た瓶（とにかくラベルを見ても私には何だか分からなかったと思うので、それさえ見なかった）を飲むように彼に渡した。彼はこの白ワインを味わったが、私は少し甘すぎると思った。『モンバジャックだ』と彼は言った。ラベルを見ながら、私が『えーと、その通りだ』と答えると、『三十七年の産』と彼は言った。私はラベルを見て、それが正確であることを知った。この二つのことばから一種のショックを受け、私から離れなかった。そのような感覚的な記憶をどのようにして持つことが出来るのか。感覚を把握するとき私に体験できるのは、瞬間を消すもの、この瞬間のなかで消えるもの以外にない。感じる諸瞬間を比較することは絶対にできない。私は何も覚えておくことができない。ピエール・サンソが言ったように、「発端の」力は比類なき力である。

後年になって、ときどき、私はバシュラールにこの話を繰り返して言うと、彼は笑った。『あなたをびっくりさせるために一興を演じたんですよ。実際は、でたらめに年代を言ったのです。運がよかったです』と彼は言った。私はこのような幸運を一度として信じたことはなかった。事物と通じるバシュラールの感覚、秘密めいていてほとんど魔法のような力を持ち、真面目だが、おそらく楽しむような感覚、この感覚が私のなかに形成されたのは多分その日である。それゆえ、私の選んだ数行で本を読むことが出来るのを「思い出し、そして私がお酒を飲んでいると思われる」(『夢見る権利』PUF版、二百九十六ページ)という文章は私にとって非常に奇妙な感じであった。つまり、私

は一人称のバッシュラールのワインをこのグラスを使って伝え、そして葡萄の房の下着になった「つつましい葡萄の葉」という文章に至っては思わず微笑みを浮かべて、聖書のエロチシズムをぼんやり考えるようになった。従って、文章は次のように続いたのである。

葡萄の木、『ろうそくの炎』（PUF版、七十八ページ）

葡萄の木とワイン、『大地と休息の夢想』（ジヨゼ・コルティ社版、三百三十二ページ）

ワインと夢、『大地と意志の夢想』（ジヨゼ・コルティ社版、二百二十八ページ）

ワインの赤、同書（百四十五ページ）

小川、『水と夢』の最後で（ジヨゼ・コルティ社版、二百六十一—二百六十二ページ）、たかさんのワインのなかに

「石の上を流れる、すっかり丸い、美しい言葉」が、言葉の幸せな水が入ったのである。

これに続く資料は、おそらく何度も繰り返されたとはいえ独特な、人生の諸瞬間に関係したものである。

めまい（単数形）

(46)

ヴィルヌーヴ・レス・アピニョンの山奥で、一九八三年七月、ジル・ジュアナル企画のバッシュラールに捧げられたシンポジウムが行われたが、そこで、瞬間というバッシュラールの道を進むピエール・サンソは休止と呼ばれるものを探しあてた。「瞬間は休止を前提とする」という文章があるが、これをさらに進めて、あるいはむしろこれ呼び込んで自分流に意味を広げ、「時間は切断する」と彼は言った。このとき、どうしたら戻ることができるのだろうか。

「瞬間が繰り返されるのでなければ。」これは驚くべき出会いである。私はめまいがするようだ。一人称で書くバシユラルのような人にとって、なぜそれが重要だと思ったのか言うまでもなく、ストラスプールの尖塔の頂塔まで登ったときに感じためまいの記述が、いわば、中心的な場所を占めなければならぬように私には思われた。「心的な不幸」と呼ばれるものの形をとるにもかかわらず、バシユラルはそこに瞬間の繰り返しを認めるのである。「わが想像的墮落は私の夢に付きまとい続けるのだ。」このめまいは『大地と意志の夢想』（ジヨゼ・コルティ社版三百四十四—三百四十六ページ）にある。

めまい（複数形）

『ろうそくの炎』（PUF版、三十二ページ）にある「私はエンペドクレスのめまいに耐えられない」という文章を、私は少し滑稽なやり方で、この複数形に、付け加えた。おそらく次のような事情によって行われたのである、つまり、詩が作られるのは思想によってではないと、確信をもって私達は話し合っていたが、ある日のこと、私は挑発するように彼に言った。『とはいえ、もしも、思想が事態をもたらしたならば、どうしますか。』そして私は『火の精神分析』のいくつかの命題を四行詩のなかに入れるという賭を行った。「エンペドクレスの庭師」という題で。彼は賭に応じた。結果は奇妙なものだった。以前クノーが、技術的なことで、私に言った、『ねえ、君はその作り方を知っているのかい。』どうして彼の言うことを聞かなければならなかったのか、私には分からない。私は思想から詩を引き出したつもりだったが、バシユラルはその「思想」が何もないということを確認した後でしか詩を楽しまなかった。

孤獨―夜

私は重大な「私」に到達し、もっとも衝撃的な資料のなかの一つを引用した（『夢見る権利』PUF版、二百三十八―二百四十四ページ）。

次に私はもっと通俗的な行為に、物事に戻った。

物事

『ろうそくの炎』のなかの一篇文章（PUF版、八十九ページ）。『空間の詩学』のなかの別の文章（PUF版、十九ページ）。『空と夢』のなかのもっと秘密めいた件（ジョゼ・コルティ社版、十二ページ）。「ああ、私の物事よ、どんなに私達は話し合ってきたことだろう。」

私はペン（セルジャン―マジョール）に一番の重要性を与えた。「私のペンからインクがもれると、考えが横に逸れてしまう。誰か私にも学生時代の素晴らしいインクを返してくれるのだろうか。」『夢想の詩学』（PUF版、六ページ）

そこに私は、次のページを、否応なしに付け加えなければならぬ。それはロベール・サバチエの書いたもので、『ソレール』（八三年、春、六十六―六十八ページ）のなかにある。そこではこのペン（そして他の物事）が問題になっている。ロベール・サバチエは私が引用するのを禁止しないと思う（その場面は『ろうそくの炎』を印刷した

数部にサインをするとき、PUF社で起きた)

「彼は私に、何で書きましょるか、と聞いたので、私は彼にボールペンを差し出した。彼は茫然としてそれを見つめ、『この道具は一体何ですか…』と聞いた。そしてペンを求めた。万年筆を差し出すと彼はそれを拒んだ。『ペン軸がどんなものか、御存じありませんか。木を裁断して、そこに金属のペンを付けたものですよ。』『驚ペンではいけませんか。』『いいですとも。』私はオフィスからオフィスへと走りまわり、彼の求めるものを探して最後には会計係のところに行かなければならなかった。彼はペン軸を手にし、セルジャン—マジョールのペンを選び、インクのなかへ浸ける前にペン先を湿らす、という子供っぽい仕種をした。彼はこうしたしきたりを終えてから、献辞を書きはじめた。しかしペンがふくらんだ紙に引掛かったので、『染みを作りましたね。』と私は彼に言った。そのため、まるでいたずらを行うように、彼はインク壺のなかでペンを調べ、ぶつぶつ言いながら、故意にインクの染みをページの上に落とした。『生きた書体だ、完璧に生きた書体だ、…(そして本のタイトルを指しながら)まるで生きた炎のようだ。』私は彼の茶目つ氣をとがめた、すると彼はその氣があるのを認めながら笑い出したのである。」

この話は非常に素晴らしく、よく描写されているので、全く真実でないということはない。これは一人称の価値を持った三人称のバシュラールである。

次に別の話がある。

この本は、私にとって、個人的に熱心に書かれた手紙が役立つのである。バシュラールの存在によって一層驚くべき手紙となる。当時女学生だったクロード・ルロワ夫人はいつも彼を訪ねていたが、その彼女が書いたものをここに

転載させてくれた。

「ある日、私は言いました、『先生、私はもうすぐ結婚します』『それは良かった、クロード』と私に返事をしました、それから、その直後『君は料理が作れるのかね』『全然だめです』『何だって、全然だめなの。でも、それは大変だ。君は御主人に哲学を食べさせるつもりなのかね。』先生の叱責はうわべだけではなかった。私は先生の後について台所へ行き、裏付けのために実演したじゃがいも料理の作り方を注意深く書きとめなければならなかった。」

バシュラールが「他者」の孤独な行為に向かったり、二人称に向かったりするものでなければ、彼のなかに一人称はないと私には思われる。

従って次にいくつかの行為がその文章のあとに続いた。

行為

磨く行為が『大地と休息の夢想』（ジヨゼ・コルティ社版、四十二ページ）にある。そして『水の夢』（ジヨゼ・コルティ社版、百九十八ページ）にもある。

清掃

「機会的な行為の張本人になるといふことは何という驚きだろうか。詩人が家具を磨く時も同様に驚きである」という教えのほかに、磨く行為のページにもある。バシュラルの「私」を明らかにしているように思われるもの、それはまもなく彼が「あなた」に向かう、という点にある。このことは教えられた教育者の章で明らかになるだろう。少し特殊な言葉を使うと、この「私」は間主観性を導入している。

これらの資料を読んでからそれほどの月日は経っていない、そして私にとって、進歩的な企業が凡例などを使って主婦に勧めるさまざまな原料や雑巾、祖母のジャムが入った素晴らしい鍋、もはや使われていない、古い片手鍋が台所のテーブルの上にならない夏はもはやない、ということを確認しようと思う。もしも「汚れが浄化作用を抑えるニスであるならば」、「鍋よ、おまえは太陽になりなさい」という文章ができあがったとき、そして多分同じボードレール風の聖体顕示台の想像を絶する輝きが有毒な緑青の後に続くとき、労働の終わりにどのような神話を享受することが出来るのだろうか。

引き続き、同じ感興を受けて、

ワックスで磨かれたテーブル

『空間の詩学』(PUF版、七十三ページ)が続く。

最後に、同じ作品から

不眠症はいたるところで引用された資料である。この資料は、いつの日か、リセヤコレージュの選集に入ることだろう。残念なことに、この種の作品は良い評価を得ない。良い点は、かつて学んだラ・フォンテーヌのように、意外なほど記憶の底に残ることである。

私にとって、ここでは、この資料が補足的な価値を持っている。それがちょっとした散文詩を作ったからである。

「バシュラールは詩人でしたか。彼は詩を書きましたか」という質問の答に関心をもちながら、私はあらゆる所で詩的なはしびみの棒を振っていた。次の文章の美しい展開に際し、この棒がゆったりとした調子で動いたのである。

「哲学者の病気である不眠症が都会の騒音で神経のいら立ちを高ささせ、夜遅く、モベール広場で車がうなり声を立て、トラックの疾駆が都会人の私の運命に呪いをかけるとき、私は大洋の比喩に生きて、心がなごむのである。」

私は今日バシュラールの書体の特徴と広がりを見無視するのではなく、ただ単にそれらを実質的だと思わないだけである。彼は「それ故に」ということをただちに引き出すために——でもこれにあまり興味はないが——、「私には出来る」ということを自分に与えたがっていたように思う。そしていつの日か「イメージ——文章」と呼ぶようになる詩的瞬間の独特な形態を理解したがっていたように思われる。

詩は知——行為ではなく、「生きた——文法」である。彼がサン・マルタンから借りてきたと言った、とても神秘的なこの観念は修辭学を黙認しない。たとえ沢山の仕事（才能のあるなしにかかわらず、一日に四時間書くこと）が必要だとしても、芸術は仕事を持たず、仕事なしで済ますことができる。

言語の美は過去にない。

価値

結局「打ち明け話」が「価値」の確立にまで行くべきだと私には思われた。バシュラールは自分自身を価値の哲学者だと思っていたのではないだろうか。

この表題のもとで、私はまず『ロートレアモン』（ジョゼ・コルティ社版、二十一—二十一ページ）から若干の文章を集めた。そのなかで彼は、「個人的な打ち明け話」によって自分の反省にあえて光を当てることを明言している。ところでこの打ち明け話は、苦痛、疲労、失敗を「動物化する傾向」、希望と同時に強さにも触れるような部分的な小さな死を「哲学的に」受け入れる傾向の告白である。この「あまりにも哲学的な」、生の偉大な瞬間。難しい決断の告白。

『夢想の詩学』（PUF版、二ページ）から私は「夜が来たとき」哲学者が行う選択についての文章を引用した。同様に『フェニックスの詩学、序文』から、決して形而上学者にならない「哲学者の二等分」についての楽しい文章を引用した。次に『大地と休息の夢想』から、「群がる」という動詞のイメージを十分に追跡できなかったことを遺憾に思う文章（五十八ページ）が続いた。

ピエール・サンソは、単語を嗅ぎ分けるバシュラールの趣味にどれほど感銘を受けたことか、と私に言った。ベルジュは一群の単語を追っているにもかかわらず単語を先導している。それというのも、事物が単語を創造すると思われているのに、バシュラールにおいては単語が事物を創造するからである。彼が「ことばによって現実を見出す」と躊躇せずに言っているのは事実である。群がる、ちらちらする、まばたく、ぐらつく、といった湿音の子音を持つ単語にとってそれは趣味と考えることが出来よう。

単語の夢想家と彼の夢想が、『夢想の詩学』（PUF版、十五、十六、十七ページ）と『ろうそくの炎』（PUF版、五十四―五十五ページ）のなかのいくつかの文章を私に提供してくれた。

「単語そのもののなかで女性的な深さを再び開くこと」という文章や「ペンの下で、音節の解剖がゆっくりと展開する。単語は内的な夢想の危険にさらされながら、音節ごとに生きている。」という文章を一人称のバシユラールの中心そのものに位置づけられないわけにはいかなかった。最後は「もし（研究している）本から眼を上げて、ろうそくを見つめるならば、私は研究する代わりに夢を見る。」というところまで行きつく。

同じ『ろうそくの炎』から私は有名な存在のテーブルを引用した（百十一ページ）。

そして私は読書の健啖という驚くべき文章で終えたのである。「朝から、テーブルに積まれた本を前に、読書の神に向かつて、飽くことのない読書の祈りを捧げる。『わが日々の飢えを今日も与えたまえ…』なぜならば空の上、彼方の天国は広大な図書館ではないのか。』『夢想の詩学』（PUF版、二十三ページ）

アンソロジーという名前と呼ばなければならないので、ここではそのように呼ぶが、こうした「アンソロジー」は哲学という単語のせいでやる気を失った沢山の人々（哲学者たちがやる気を失わせた沢山の人々）をバシユラールへと導く性質のものであるように思われる。

私はその素描しか描かなかった。

アンドレ・ブランクールはこの考え方を素晴らしいと思った。彼は愛想だけの判断を下さない人である。

他の多くの人々がこの計画に取り組んでほしいと思う。他の人々ならば私にできなかった以上のことを実現させることができるだろう。父親は似たような計画を何も恐れなかった、と彼らが最後にはシュザンヌ・バシュラールを説得するだろうと確信している。

〈注〉

- (1) *La Formation de l'esprit scientifique*, Vrin, 1972, p. 13.
- (2) *Ibid.*, p. 23.
- (3) *La Flamme d'une chandelle*, PUF, 1975, p. 105.
- (4) *L'Eau et les rêves*, José Corti, 1979, p. 11.
- (5) *Ibid.*, p. 11.
- (6) *La Psychanalyse du feu*, Gallimard, 1972, p. 21.
- (7) *Ibid.*, p. 140.
- (8) *La Flamme d'une chandelle*, p. 67.
- (9) Jean-Claude Margolin, *BACHELARD*, Seuil, 1977, p. 173.